

セイネンキニオケルタイジンフアンイシキニカンス ルケンキュウ : ジソンシン、タシャヒョウカニタイ スルハンノウトノカンレンカラ

調, 優子
九州大学大学院人間環境学府

高橋, 靖恵
九州大学大学院人間環境学研究院

<https://doi.org/10.15017/884>

出版情報 : 九州大学心理学研究. 3, pp.229-236, 2002-03-31. Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :



青年期における対人不安意識に関する研究

— 自尊心、他者評価に対する反応との関連から —

調 優子 九州大学大学院人間環境学府
高橋 靖恵 九州大学大学院人間環境学研究院

A Study on Negative Self-Awareness in Interpersonal Relationship in Adolescence — The Analysis of Relations between Self-Esteem and the Reaction for Evaluation by the Other —

Yuko Shirabe (*Graduate school of Human-Environment Studies, Kyushu University*)
Yasue Takahashi (*Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University*)

This study examined the relation between negative self-awareness in interpersonal relationship (NSAIR), self-esteem, and the differences of reaction to the negative evaluation by others. Comparison of these factors were made between high and low NSAIR subjects. The results showed high and negative correlation between the Anthropobic Tendency Scale (Hori & Ogawa) for measuring NSAIR and self-esteem scale (Janis & Field).

The comparison was made between high and low NSAIR subjects regarding the reaction to negative evaluation by others appeared on the sketch method. The comparison showed differences in the reaction to the evaluation from the same sex subject. Then, for further understanding descriptions of 20 high NSAIR subjects and 31 low subjects were selected. The results showed that subjects in low NSAIR tend to maintain their mental balance by taking a distance from such an evaluation or by devaluating the person. On the other hand, subjects in high NSAIR tend to recognize the evaluation excessively without protecting themselves from being hurt and, thus, recognize negative influence.

Keywords: negative self-awareness in interpersonal relationship, adolescence, self-esteem, the reaction for evaluation by the other

問題と目的

青年期は心理的・身体的に急速に発達する時期であり、近年のめまぐるしく変動する社会にあって、そこへの適応も同時に苦慮する青年たちにとっては、不安定性の強くなる時期でもある。青年期の発達課題の一つに対人関係の拡大が挙げられるが、その一方で、対人恐怖が好発するのもこの時期であるとされている。

対人恐怖とは、「対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一つ」で、「他人と同席する場面で不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人から軽蔑されているのではないかと、嫌がられているのではないかと案じる」というものである（笠原 1977）。

「対人恐怖」というのは単一の症状名ではなく、赤面恐怖や視線恐怖、醜貌恐怖などといった類似の構造をもった病型の総称であり、これらがまとめられるのは、「他人の前での自己のあり方、他人に知覚されている自分について悩む」という基本的特徴が認められるからである（木村 1972）。

ではこのような対人恐怖の発症はいつ頃顕著にみられるのであろうか。対人恐怖の経過について同じく笠原（1977）は、「10歳台後半から20歳代前半の青年男女を悩まし続ける」とし、また、笠原（1984）では、「約18歳から24歳の青年層に對人恐怖の心性が根強く潜在してい

る」と指摘している。発症に至らなくても、このようにこの時期に對人恐怖的な心性を抱える青年は少なくないと言われており、對人不安意識という視点からも理解されている。本研究では、このような青年期に一般的に存在するものとして對人不安意識を扱うことにする。社会の急速な変化に伴い、對人恐怖の現れ方も変化しているという指摘は多い（土居 1971, 田中・小川, 1992他）。對人恐怖の在り方はその社会の對人関係様式を反映していると考えられる。この社会変動に伴い對人関係様式が変化すれば、それにつれて對人不安意識の特性も変化していくといえ、現代青年の對人不安意識について検討することは意義のあることと思われる。對人不安意識は多くの青年が多かれ少なかれ持っているものであると思われるが、この意識の程度が、自分に対する他者評価の受け止め方に関連しているのではないだろうか。

多くの神経症症状の中でも對人恐怖は日本人の對人関係様式をよく反映していると言われており、その背景について木村（1972）は次のように述べている。「日本人は自分自身の存在の根拠を自己の内部ではなくいわば自己の外部、つまり自己と他者の間にもっており、對人恐怖症者においては、自己の自主的な存在というのはいわば自己の外部、つまり自己と他者の間にもっており、對人恐怖症者においては、自己の価値はもっぱら他者に依存し、しかも自己は否定的な評価の対象となる」。さらに、北西（1998）は、對人不安を自己意識の過剰という観点から説明している。

「自己意識の過剰な人は、自己の在り方を内省し欠点を強く感じ、自己の性格を不安に思い、鋭い劣等感にさいなまれている」とし、「自己の在り方を自ら悩むだけでなく他者に映るであろう自己像を思い描き、思い悩む」と述べている。そしてそのことをめぐって様々な悩みが生じ、それが対人不安と呼ばれるものであるとしている。また、このような特徴から、伊藤（1997）は「対人恐怖的経験は、恐怖・不安を感じると同時に、他者からの評価をネガティブなものとして予想する経験である」として、そこから、自己の側が他者からの評価などの情報をどのように認知するかを分析する視点の必要性を指摘している。つまり、他者評価を受けた際の内面の変化に注目する必要があると言えるのではないだろうか。そこで、対人不安意識の程度により、特に他者から否定的評価をされた時、それに対して表出する反応に加え受け止め方において違いがあるのかどうか検討することとする。

また、笠原（1977）は対人恐怖の特徴として、二人でいるときは良いが三人でいるときに不安になる、と指摘している。その理由として、三人の状況は人間の原初的単位的構成であり、二人ではなく三人になって初めて社会が始まるため、としている。しかし、上述したような対人不安意識の傾向を考えると、その意識の高い場合、社会においてどう思われるかということのみならず、二者関係においても他者からどう思われているかにとらわれやすくなるのではないだろうか。従って、本研究では二者の対話場面を用いての検討を行うこととした。

このような対人不安意識は、青年期における自己概念の再構成にあたって自尊心と深く関わりをもつとされている（岡田・永井，1990）。一方で、青年期は自尊心の低下しやすい時期であると言われており、自尊心が個人の精神的健康に重大な影響を及ぼすという指摘も多い。自尊心とは、梶田（1988）によると「自分自身を基本的に価値あるものとする感覚」であり、「これは通常、その人自身にも十分に意識されているわけではないが、その人の言動の暗黙の前提となり基盤となっている」としている。さらに、その自尊心を支える根拠は、人によっては現実的でない場合があると述べ、現実には自分自身のものとして誇るべきものがなかったり、現実には持っているものでは自分の自尊心を支えるのに不十分と感ぜられるときこうなりやすいと説明している。このような自尊心は、現実的な基盤を持たないため傷つきやすく、また、そうした自尊心を維持するためには内面で無理を重ねる必要があることもあり、対人関係も不安定なものにならざるを得ないという。また、斎藤（1993）は、自尊心について、日常的に感じられる自信、優越感、劣等感がこれに対応すると説明しており、「自己を肯定的に評価する程度が高いほど、自尊心が高いことになる」と述べている。さらにCoopersmith（1967）は、自尊心が高いという

ことは、現在体験している自尊心の高さを示すだけでなく、個人の価値を低下させられそうな状況において自尊心を守る能力の高さも含むと述べている。つまり、個人の価値を低下させられそうなになった時、経験する不安の量を軽減し、個人的な均衡を維持するのを助けるという。そのためには、自分の失敗を過小に評価し、自分の価値を下げるような他人の行為を最小限にしか認知しないか、あるいは完全に抑圧してしまうという。そのことから徳本・北山（1995）は、自尊感情と欲求不満解決様式との関連を検討し、自尊心の低い人の場合、自分の価値を低下させられそうになっても、傷つくことから防衛することができず、自分の失敗を過大に評価したり、他人による自分の価値を低下させられそうな行為を過大に認知してしまうのではないかと考察している。つまり、自尊心を十分に持てていれば、その自己評価が、他者による評価によって、大きく揺らぐということは起こりにくいと考えられる。以上の観点を踏まえ、他者評価が自己に及ぼす影響を考える際に、自尊心という視点からの接近は、対人不安意識と同様に不可欠であるように思われる。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では他者評価をどのように捉えているかを具体的に理解するためのものとして、投映法を参考にして作成した略画法を使用する。略画法は、ロールシャッハ法やTATなどの投映法と違い、被検者が答えを自分で記入していく方法であり、検査者に対して直接口頭で答える必要がないため、テストに対する緊張感や不安を軽減し、防衛的になりにくくすることができると言われている（中村 1998）。また、刺激が具体的であるため、それに対する反応の種別がそれほど多くなく、反応を量的に評価できるという利点がある。以上のことから、否定的評価を受けた際の反応をみるという目的に最も適している方法であると考えた。

青年期は、主に中学生や高校生を含む青年前期と、大学生などを含む青年後期に大まかに分けられる。対人恐怖症が中学生や高校生においても発症しやすいことを考えると、その時期の対人不安意識についても検討する必要があると思われるが、精神的にまだ不安定であり、今回のような調査内容が及ぼす影響を考えると、実施は困難であるように思われた。そこで、今回は立場的にも、精神的にも比較的安定していながらも、これから社会にでていく可能性が高く、それゆえに不安も抱きやすいと考えられる大学生に焦点をあて、調査したい。

以上のことから、本研究では、現代青年の対人不安意識と自尊心との関連性を検討した上で、対人不安意識の程度において、他者からの否定的評価を受けた際、その反応にどのような違いがみられるかを明らかにすることを目的とする。具体的には、以下の二つの分析によって検討を進めていくこととする。まず分析1においては、

現代の青年の対人不安意識と自尊心との関連について分析し、対人不安意識が高い場合、自尊心は低くなる、という仮説のもとに考察する。それを踏まえて分析2では、筆者独自に作成した略画法を用いて、対人不安意識の程度により否定的な他者評価に対する反応に違いが見られるのかどうか、量的、質的な分析を用いて検討する。

方 法

1. 対象者 福岡県内の国立大学、4年生私立大学の学部生・大学院生240名（男性124名、女性116名）
2. 調査内容 1) 対人不安意識と自尊心 対人不安意識の測定に堀井・小川（1996）により作成された対人恐怖心性尺度を用いた。これは30項目それぞれについて7段階評定を求めるものである。この質問紙は、「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」「生きることに疲れている悩み」の6因子が見い出されている。

自尊心の測定に Janis, I.L. と Field, P.B. が1959年に作成した、Persuasibility のパーソナリティ的基礎を分析するための測定尺度を、遠藤・安藤・冷川・井上（1974）らが日本語翻訳したものを用いた。5段階評定で、23項目から成る。質問形式を加筆修正して使用した。（以下 SE 尺度とする）

2) 略画法 次に他者評価に対する反応を測定するものとして、筆者が作成した略画法を用いた。略画法図版の一部は Figure 1 参照。この略画法は、否定的な評価をなされている場面が2種類、それぞれに評価をする者とされる者の二人が描かれている。登場人物の顔の描写は省略した。それは、表情により特定の反応が引き起こされるのを避けるためである。また、否定的評価が被験者に及ぼす影響を考えて、肯定的評価をなされる場面を1種類、否定的評価の間に入れる形で作成した。尚、この分析は本研究の目的ではないので行わなわなかった。

否定的・肯定的評価となる言葉の選択については、言われたら嫌な言葉とうれしい言葉を5名に聞き、それを

参考にそれぞれ12項目ずつの選択肢と自由記述の欄を設けた質問紙を作成した。それを男子21名、女子29名の計50名に実施し、選択肢からはそれぞれから三つずつ選択してもらった。その回答を集計した結果、言われたら嫌な言葉の中で最も多く選択されたのは『媚びうってるね』で、次に『口ばかりだね』となった。うれしい言葉としては、『頼りになるね』が選ばれた。

どの言葉も、それを言う相手が同性であるか異性であるかで受ける印象は異なると思われるため、それぞれについての回答を求めた。評価は『○○って～ね』という形式で為され、評価をされる者の名前がその○○に入ると教示した。「あなた」や「きみ」などといった言葉は普段身近な人の中であまり使われることがないと考えたためである。さらに、略画法の評価を受ける側の性別と、実際の被験者の性別は、一致している方がより容易にイメージできるのではないかと考えられたため、それぞれ男性用と女性用のもの2タイプを作成した。

そしてその評価に対し評価される人が実際にどのように反応すると思われるかを、「表出する反応」として吹き出しのなかに書き込んでもらい、さらにその絵の横に「その時の気持ち」、「しばらくしてからの気持ち」がどうであると思われるかをそれぞれ記入してもらった。これは、表出する反応と実際に感じられている気持ちとは必ずしも一致しないのではないかと、また言われたその時に感じられたものと時間が経ってからの感じ方も異なるのではないかと推測し考案した項目である。

3. 調査時期 1999年11月上旬～12月中旬。
4. 実施手続き 授業時間を利用して集団で実施した。男性用と女性用で内容が異なるため、それぞれの表紙の色を違えて、被験者の性別に注意して配布した。尚、略画法については、教示文は次のようにした。

「下の絵は、左側の人が右側の人について意見を述べているところです。○○には、右側の人の名前が入ります。右側の人を、それに対して答えると思われる言葉を、空いている枠（吹き出し）の中に書き込んでください。さらに、絵の右側にあるそれぞれの質問に対し、当

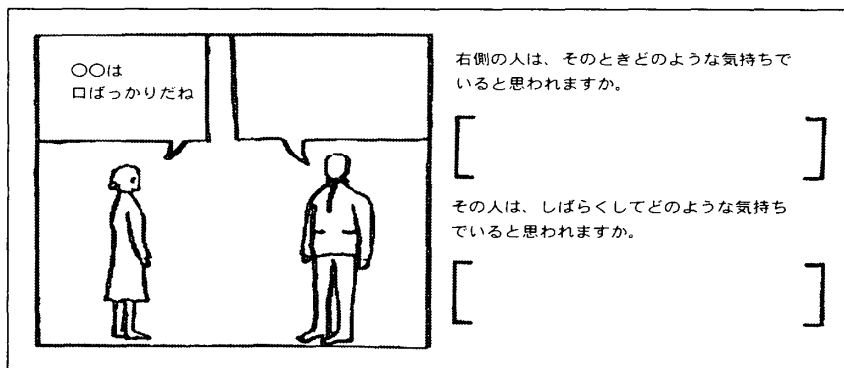


Figure 1

てはまると思われる気持ちを下の空欄に記入してください。ページをめくると、このような絵が6枚ありますので、この例のようにして順番に書いていって下さい。」

結果と考察

1. 分析 1-対人不安意識と自尊心の関連 男女の対人恐怖心性尺度の合計得点と各因子得点を比較するt検定を行った結果 (Table 1), 以下の二点が明らかになった。男性が女性より対人不安意識が高い傾向にあった ($t=1.78, p<.10$)。そして、男性が女性より「人の目が気になる悩み」因子の得点が有意に高く ($t=2.18, p<.05$), 「生きることに疲れている悩み」因子の得点が高い傾向にあった ($t=1.75, p<.10$), ということである。

また、対人恐怖心性尺度とSE尺度の相関係数を求めたところ、高い負の相関関係にあることが認められた ($r=-.67, p<.001$)。よって、対人不安意識が高い者ほど、自尊心は低くなるといえる。

周囲を見ると、女性の方が男性に比べ複数で行動していることが多く、人にどう思われているか気になりやすいのではないかと思われたが、実際はこれまで先行研究において指摘されてきた通り、対人不安意識は男性の方が高い傾向にあった。近年女性の対人恐怖症者が増加しているといわれ、その背景には女性の社会進出が進んできたことがあると考えられている。しかし依然として男性の方が多いという結果となったのは、社会の男女に対する要請の違いを反映しているのだろうか。「人の目が気になる悩み」因子は、堀井ら (1996) によれば、対人接触場面において、他者とまなざしが合うことや他者から見られることに対する恐れを表す。これは自他の視線へのとらわれから生じる悩みであり、近年対人恐怖の症状の中でも視線恐怖が増加の傾向にあるという指摘もあることから注目されているが、なぜ男子に多いのかは明らかでない。

「生きることに疲れている悩み」因子は、同じく堀井ら (1996) によれば、生への充実感が持てず、抑うつになり、心身の不調を訴えるというような悩みを表すも

ので、過剰な対人意識や症状へのとらわれによって現実の社会生活が困難となった結果、二次的に誘発される悩みであるという。主症状ではないが、自己への不信感や感情的基調を表しており、対人不安意識の一つの特徴であり、臨床的にも重要な意味を持つ尺度であるとされている。これらの結果から、現代の男子学生は女子学生に比べ、人の視線や自分の視線にとらわれやすく、毎日の生活に充実感を見い出せない傾向にあると言えるだろう。

2. 分析 2-対人不安意識と否定的他者評価に対する反応との関連

ここでは、大きく分けて以下の二つの分析を行った。

まず全体的な傾向を捉えるため、対人不安意識の程度による否定的評価に対する反応の差を、 χ^2 検定を用いて検討した。次に、対人不安意識の程度による反応の差異をさらに具体的にとらえるために、質的な検討を行った。

1) 量的分析について 表出する反応と、そのとき実際はどう感じているのかを比較するという目的のもと、それぞれについての回答を求めたが、実際にはその「表出する反応」の様相が多岐に渡っていて分類が困難であったため、「その時の気持ち」「しばらくしてから気持ち」に関して検討を行った。その評定にあたっては、心理学専攻の大学院生2名と筆者の計3名で行った。それらは以下の四つのカテゴリーに分類された。

(a) 怒りや非難など、相手に向かう感情 (b) 傷つき、ショック、気になるなどの自分に向かうネガティブな感情 (c) 反省や改善意欲など前向きな姿勢 (d) 言われたことに対する疑問や、それを気にしない態度

対人恐怖心性尺度得点の平均値 (103.98) で高・低群に分け、否定的評価『口ばかりだね』と『媚びうてるよね』を同性から言われた場合と異性から言われた場合に、「そのときの気持ち」と「しばらくしてから気持ち」、計8条件の、(a) (b) (c) (d) における人数比率の差を検討した。

χ^2 検定の結果、同性から『口ばかりだね』と言われて「しばらくしてから気持ち」において有意差が見られた。さらにその部分の残差分析を行ったところ (Table 2), 低群の比率が(a)において有意に高く、(c)においては高いという傾向が得られ、(b)においては高群の比率が有意に高く、低群の比率が有意に低いという結果となった。

「その時の気持ち」はどちらの否定的評価においても差が見られなかった。言われた時の気持ちには、両群に大きな違いはないと考えられる。しかし、『口ばかりだね』と言われて「しばらくしてから気持ち」においては差が見られた。つまり、評価を受けて時間がたつてくるとそれぞれの受け止め方に違いが出てくるといえるだろう。

対人不安意識の低い場合、相手が自分をどう思っているか、ということにとらわれることなく、自分はそのような不当な評価をされるべきではないと強く思う傾向にあ

Table 1 SE尺度の合計得点と対人恐怖心性尺度の合計得点及び各因子得点における男女の平均値

	男性 M	女性 M	t値
SE尺度	66.48	63.24	1.75†
対人恐怖心性尺度	107.28	100.45	1.78†
第I因子：自分や他人が気になる	18.46	18.78	.43
第II因子：集団に溶け込めない	18.65	17.23	1.51
第III因子：社会的場面で当惑する	19.31	18.39	1.02
第IV因子：人の目が気になる	16.31	14.38	2.18*
第V因子：自分を統制できない	17.96	17.61	.42
第VI因子：生きることに疲れている	16.58	15.23	1.75†

* $p<.05$ † $p<0.1$

Table 2 残差分析の結果

		(a)	(b)	(c)	(d)
対人恐怖心性尺度得点	H群	-1.63	3.11**	-1.35	.87
	L群	2.43*	-2.03*	1.73†	-0.74

**p<.01 *p<.05 †p<0.1

- (a) 怒りや非難など、相手に向かう感情
- (b) 傷つき、ショック、気になるなど自分に向かうネガティブな感情
- (c) 反省や改善意欲など前向きな姿勢
- (d) 言われたことに対する疑問や、それを気にしない態度

と考えられる。そのため、その思いを傷つけられたことに対し怒りを感じてきたりするのではないだろうか。あるいは、自分が不当な評価をされるべきではないと思えることによる心的なゆとりがあるために、相手の評価に対しうまく距離をとり、自分にプラスになるものとしてとらえることができたのではないだろうか。つまり、対人不安意識の低い場合、相手が認知した自分の像にとられていないために、否定的評価に巻き込まれてしまうということが起こりにくくなるのではないだろうか。

それに対し対人不安意識の高い場合、相手が自分をどう思っているのか強く意識していると思われる。そのため、否定的評価を受けたことで相手に嫌われてしまったのではないかと気になり、その場だけで忘れることができずにその気持ちをひきずってしまうということが考えられる。

以上のように『口ばかりだね』については差が認められた一方で、『媚びうってるよね』においてはどちらの気持ちにおいても差が見られなかった。この件に関しては、この結果のみから推測することは困難であるため、次の質的分析で検討したい。

また、同性に評価を受けた場合においてのみ差が見ら

れたことに関しては、青年期においても、異性との関係をさらに発達した関係にとらえると、同性同士が基本的な友人関係であり、対人不安意識の高い場合嫌われたくないという気持ちを同性の友人に対してより強く抱きやすいためではないかと考える。

2) 質的分析について この分析では、対人恐怖心性尺度の平均とSD (29.82) により抽出し、有効回答者であったHigh群20名(男性13名, 女性7名)とLow群31名(男性15名, 女性16名)を対象者とした。対象者の内訳の概要はTable 3に示した通りである。また、中でも特徴的であると思われた両群2名ずつの回答をTable 4に示す。

まず、量的分析で差の見られた『口ばかりだね』について見ていくと、「むかつく」や「腹が立つ」というような表現が、Low群において顕著である点が、特徴として挙げられる。これは言われたその時で多数見られ(L3, L7, L11, L12, L18, L23, L24, L25, L26, L30)、「しばらくしてからの気持ち」においてもなお少なからず見られた(L4, L23, L26, L31)。それに対しHigh群は、「そのときの気持ち」では2名(H9, H16)、「しばらくしてからの気持ち」では1名(H8)のみである。これは、分析1でも述べたように、対人不安意識が低い場合、自分は大事に扱われるべきものという意識の高さから、そうされなかったことに対して、それは不当であるという怒りを感じていると思われる。その他にも、「そういうことを言うなんて失礼だ。」(L8)というように、自分の価値を高く保ったまま接している様子が伺える記述も見られた。また、「しばらくしてからの気持ち」において、「相手を嫌いになる」(L5, L7, L26)や、「自分のことも振り返ってみれば」(L4)「あなたにそんなこと言われる筋合いない」(L12)「でも、そういう自分は、人に言えるほど物事をきちんとこなしてるわけ？」(L14)「相手に対して不信感を持ち、とても批判的になっている」(L15)「彼女の人を侮辱する態度が許せない。」(L27)などといったように、否定的評価をされた自分に非がある

Table 3 質的分析対象者の概要

ID	性別	学年	ID	性別	学年	ID	性別	学年	ID	性別	学年
H1	女性	2年	H14	男性	4年	L6	女性	1年	L19	男性	M2
H2	女性	D3	H15	男性	2年	L7	女性	2年	L20	男性	D2
H3	女性	D2	H16	男性	3年	L8	女性	2年	L21	男性	M1
H4	女性	3年	H17	男性	D2	L9	女性	2年	L22	男性	2年
H5	女性	3年	H18	男性	M1	L10	女性	2年	L23	男性	4年
H6	女性	2年	H19	男性	D3	L11	女性	4年	L24	男性	M1
H7	女性	2年	H20	男性	4年	L12	女性	1年	L25	男性	4年
H8	男性	4年				L13	女性	3年	L26	男性	3年
H9	男性	4年	L1	女性	2年	L14	女性	M2	L27	男性	2年
H10	男性	4年	L2	女性	3年	L15	女性	3年	L28	男性	M1
H11	男性	4年	L3	女性	4年	L16	女性	2年	L29	男性	2年
H12	男性	M1	L4	女性	-	L17	男性	M2	L30	男性	4年
H13	男性	4年	L5	女性	2年	L18	男性	4年	L31	男性	4年

Table 4 否定的他者評価に対する反応 回答例

ID	相手の性別	受けた評価	表出する反応	そのときの気持ち	しばらくしてからの気持ち
H 1	同性	口ばかりだね	悪かったね。	ひどい。	私は本当に口ばかりなのか。
	同性	媚びうってるよね	えーひどいー。	そんな風に思われていたなんて。	嫌だなあ 私ってそんな人間なんだ。
	異性	口ばかりだな	ひどい。	自分はどうだっていうのよ。	やっぱ私ってそういう人間なのかな…。
	異性	媚びうってるよな	何てこと言うのよ。	ひどい。ショック。	私ってそんな風に見られてんだ…気を付けよう。
H 16	同性	口ばかりだな	そんなことないよ。	見下されるのは腹が立つ。	人から言われるということは、口ばかりの面が少しはあるのかもしれない。
	同性	媚びうってるよな	どうしてそんなことを言うんだ?	ひどいこと言われてくやしい。	媚びをうっているって、そう言われることしたのかなあ。
	異性	口ばかりだね	そんなことないよ。	軽蔑されて悲しい。	確かに口先の面があるのかもしれない。落ち込む。
	異性	媚びうってるよね	そんなことないよ。	軽蔑されて悲しい。	媚びうってると思われることしたかなあ。
L 1	同性	口ばかりだね	えっそんなことないよ。例えばどんな時?	何か迷惑かけたっけ?	そうかなあ そんな風にとられることもあるんだなあ。
	同性	媚びうってるよね	うそっそんなことしてないよ!	むかつく!!	どう思われようが自分のやりたいようにやるからいいのさ。
	異性	口ばかりだな	そんなことないよ!	いきなり言われてもやな感じ。	ちよつと機嫌悪くなる。
	異性	媚びうってるよな	失礼な!	私のことよく知らないくせによ。くそんなこと言えるね。	もういいや。忘れよう。気にしない気にしない。
L 26	同性	口ばかりだな	何だとコラ!	むかつく。	いやなやつ相手ならむかついているが、仲のいいやつだとわれに返る。
	同性	媚びうってるよな	うるさい。	うるさい。	はずかしいわあー。
	異性	口ばかりだね	そりゃどうも。	無視してる。	むかついてくる。嫌いになる。
	異性	媚びうってるよね	お前に言われたかねー。	うるさいやつめ…。	このコを嫌いになってる。

のではなく、評価をする相手に嫌悪感を抱き、むしろ相手の方に非があるととらえているように思われる記述が多く見られたのも、Low 群の目立った特徴であった。このことから、否定的評価をされるというのは自分の価値を低下させられそうな状況であると言えるが、対人不安意識の低い者はそこで相手の価値を下げることで、自分を守ろうとしているのではないかと考えられる。その他、言われたその時は怒りを感じたり相手を責めたりしていても、「しばらくしてからの気持ち」においては「なぜだろう」(L 6, L 11, L 17, L 22)と疑問に感じたり、「反省する」(L 12, L 13, L 19, L 25, L 28)や「今度ぎゃふんと言わせよう。」(L 4)「見返してやる」(L 24)といった前向きな姿勢になる者が少なからず見られた。言われた時は揺らいでも、最終的には相手の評価に大きく左右されることなく、距離を持って対処しようとしている様子がうかがえる。あるいは、自分は価値あるものであると感じられているという精神的なゆとりからか、否定的な他者評価をむしろ自分の成長を促進する一助としてとらえようとしていると考えられる。

このような感情を相手が同性の場合は抱いていても、相手が異性になると「ショック」(L 2, L 8, L 20, L 30)を受けていたり、「かなりへこむ」(L 19)という者が少なからず見られたのも、先述した、同性は基本的な友人関係で、異性関係はそれのさらに発達したものということとの関連が考えられる。

次に、High 群について考察を進める。特に顕著であった記述は「悲しい」「落ち込む」といったものだった。基本的に、嫌われてしまうことへの不安が強くあるため、そのような評価をなされると、嫌われてしまったと感じてしまうのか、相手の評価をはねかえすことができずに真に受けてしまっていると思われる。また、「怒りたいが、実際はそうかもしれないので何もいえない」(H 11)というものもあった。Low 群において見られた「本当の自分を理解してほしい」(L 20)と対照的で、自己評価に自信をもてずに他者評価に揺らぐ様子がうかがえる。さらに、相手の評価を受けて、「軽蔑された」(H 16)「自分のどこがだめなんだろう」(H 14)といったように、言葉以上の意味を感じ取ってしまっているような記述も見ら

れた。自分の価値が低下させられそうな状況で、自分を肯定的にとらえることができず、相手の評価を過大に認知していると思われる。また、言われたその時は驚いたり疑問を感じたりしていても、時間が経つと、「人から言われるということは、口ばかりの面が少しはあるのかもしれない」(H16)というように、相手の否定的評価をまちがったものではないととらえている様子がうかがえる。

このような記述はHigh群には特徴的で、他にも「自分はそういう人間なんだ」(H1, H3, H6, H8, H10, H12, H16)というように、相手の否定的評価を吟味することなく、そのまま自己評価にしてしまっているようなものも見られた。先述した木村(1972)の見解である、「自己の価値をもっぱら他者に依存し、しかも自己は否定的な評価の対象となる」状況が見受けられる。これらの記述はLow群では見られなかったものである。その他High群でのみ見られた記述として、「だから他人と仲良くしたくないと思う」(H7)といったものもあった。評価をした相手だけでなく、対人関係自体を自ら避けようとしていると考えられる。

次に、分析1で差の出なかった『媚びうってるね』についてであるが、これに対する反応は『口ばかりだね』に比べると、両群それぞれ量的分析における有意な差は見られなかった。しかし、「むかつく」や「腹が立つ」といった怒りを表していると推測される表現については、High群(H6, H9, H11, H15)より、Low群(L1, L5, L7, L8, L11, L15, L19, L23, L29, L30)の方が、やはりその数は多い。その一方で、「落ち込む」(H5)「ずっときにする」(H11)といった記述が見られるHigh群と同様に、Low群でも「ブルー」になったり、(L18, L22)、「すごく悲しくて、切ない気持ちになる」(L3)「そんなに目立って媚びをうっているようにみえるのかと不安になり悲しくなる」(L15)といった、相手の評価が自分の評価に直接向かって感情的に反応しているような表現がここでは少なからず見られる。以上は両群の間に特に大きな差の見られない特徴である。一方でそれぞれの群に固有のものとしては、High群では「嫌だなあ。私ってそんな人間なんだ」(H3)「自分は八方美人なのかもしれないと思う。」といった、他者評価をそのまま自己評価にしているかのように思われるものや、「だから他人とは仲良くしたくないと思う」(H7)といった、対人関係自体から退こうとしているような様子が伺えるものがあった。Low群では、「相手のことを嫌に思う」(L2, L5, L7, L9, L12, L19, L26)といった、相手の価値を下げるような表現や、「本当の自分を理解してほしいと思う」(L20)「誤解されないように気をつけようかと考える」(L25)といった、他者評価によって揺るがない自己評価をもっていると推測されるような記述、「言ってもらって良かった。」(L13)というように自

分にとってプラスになるものと捉えていると思われる記述が見られた。これらは、『口ばかりだね』でも見られた両群の顕著であった特徴と共通しているように思われる。その他、両群において、「そんな風にみられているとは…もうちょっと考えよう」(L17)、「そんなことがあったか考えるが思い当たらないのでもういいやと思う」(L10)、「男に言われるなんて…バレバレ…」(H8)「……媚びらなきゃしょうがないときだってあるじゃん…」(H19)というように記述が見られたことから、実際に自分にそうした覚えがあるかどうか、大きく影響を及ぼしている面もあるように思われた。

総合的考察

本研究において、まず、対人不安意識の高い人ほど自己を肯定的に評価する程度が低いことが明らかとなった。また、他者から否定的な評価をされる場面で、なされる評価の内容により差は見られるものの、対人不安意識の高い場合、否定的な他者評価を吟味することなく採り入れようとする様子も伺えた。これらのことから、対人不安意識が高いかどうか、自尊心の高低や、他者評価の受け止め方に影響を及ぼすことが示唆されたと言えるだろう。さらに、Coopersmith(1967)が述べているように、自尊心が低いということは、自分の価値が低下させられそうな状況において、それを守る能力が低いということも含むということを考えると、対人不安意識の高い人の場合には、その力が高くなく、他者の否定的な評価をそのまま自己評価として採り入れてしまっていることが推測された。彼らは相手が自分をどう思っているかにとらわれやすく、そのために自分について否定的な評価を受けると、傷つくことから防衛できずに、他者の評価を過大に認知してしまい、自己評価を否定的にするような影響を受けやすいのではないだろうか。それに対して、対人不安意識の低い場合には、自尊心が高いことから、たとえ否定的な評価をされるという、自分の価値が下げられそうな状況になっても、それを守る能力が高いために、その評価から距離をとったり、相手の価値を下げたり、といった方法を用いて自分を守り、心理的な均衡を維持することができるのではないかと考えられる。

また、量的な分析において差はでなかったものの、概観したところ、否定的評価の内容により、特に対人不安意識の低い者は、その内容が実際自分に当てはまると意識しているかどうか、それを受けた時の反応に大きく影響を及ぼしているように思われた。一方で、対人不安意識の高い場合、その内容が自分に当てはまるのかどうかにかかわらず、ネガティブな影響を受けるものが多いように思われ、否定的な評価をはねかえすことなく、傷つきながら受け止めてしまう様子が推測された。

特に青年期はアイデンティティを確立していく時期であ

り、他者からの評価はそれまでより一層重要な役割を果たすようになる。対人不安意識が高く、自分の価値を守ることができずに、吟味することなくそれらを探り入れていくことは、ますます自己の価値を低下させ、青年期の危うさを強めることにもなりうるのではないだろうか。

また、本研究では表出する反応と実際に感じていることを比較する目的があったが、実際には表出する反応を分類することができなかった。その理由の一つに、肯定とも否定ともつかない、どちらともいえない反応が多かったということがある。これは、視点を変えれば、対人不安意識の程度に関わらず、その場で表出しても無難な答え方をしている者が多いということでもあるとも言えるだろう。このように、対人不安意識を多かれ少なかれ抱いていたとしても、その不安をそのまま表出することなく、その場に応じてうまく対処している、というのが現代における青年の姿と言えるのではないだろうか。

今後の課題

今回は肯定的評価について、本研究の目的ではないために分析しなかったが、概観したところ、対人不安意識の低い場合は、それを素直に喜んだり、あるいはそれほど気にとめなかつたりしている者が大半を占めていた。それに対し対人不安意識の高い場合においては、その評価を疑問に思ったり、むしろそれを負担に感じているような記述が少なからず見受けられた。今後は、否定的評価だけでなく肯定的評価も含めた様々な角度からの評価に対する反応を見ていくことで、対人不安意識の程度による他者評価に対する反応の違いを、より明らかにしていくことが必要であろう。

また、他者評価が自己に及ぼす影響を考える際に、その内容自体による差が非常に大きいと思われたため、それを踏まえて、今後は言葉の選択をより慎重に行う必要があると思われる。

最後に、今回分類することのできなかった「表出する反応」についてであるが、上述したように、対人不安意識の程度の差があるにせよ、また実際に感じていることは多様であるにせよ、その場に適応的な態度をとれる能力を有している者が多いと考えられた。つまりソーシャルスキルをうまく用いていると思われ、そのような観点から見ていくことも、現代の対人不安意識をより深く理解する上で重要なことではないだろうか。このようなスキルについて、様々な場面設定に応じての検討をしていくことは、臨床実践場面への理解にもつながり得るのではないかと考え、今後さらに研究を進めていきたい。

付 記

本論文の一部は、日本青年心理学会第9回大会において発表を行ったものである。座長として貴重なご示唆を

頂きました横浜国立大学教授 高木秀明先生に深謝致します。また、本論文のご校閲を頂きました九州大学大学院人間環境学研究院 野島一彦教授に心より御礼申し上げます。

引用文献

- Coopersmith, S. 1967 *The antecedents of Self-esteem*. San Francisco: W.H. Freeman and Company
- 土居健郎 1971 「甘え」の構造 弘文堂
- 遠藤辰雄・安藤延男・冷川昭子・井上祥治 1988 Self-esteemの研究 九州大学教育学部心理学部門紀要 18巻 53-65
- 堀井俊章・小川捷之 1996 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報 第20巻 55-65
- 堀井俊章・小川捷之 1997 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報 第21巻 43-51
- 伊藤直樹 1997 対人恐怖的他者認知尺度作成の試み 心理臨床学研究 第15巻 第3号 309-316
- 伊藤忠弘 1994 自尊心概念及び自尊心尺度の再検討 東京大学教育学部紀要 第34巻 207-215
- 梶田毅一 1988 自己意識の心理学 第二版 東京大学出版会
- 笠原 嘉 1977 青年期 精神病理学から 中公新書
- 笠原 嘉 1984 アパシー・シンドローム 岩波書店
- 木村 敏 1972 人と人との間 弘文堂
- 北西憲二 1998 自己意識過剰-対人不安 牛島定信編 宮本忠雄・山下 格・風祭 元監修 こころの科学 82 自己の心理学 日本評論社 Pp. 37-41
- 中村留貴子 1998 心理テストにおける自己の現れ 牛島定信編 宮本忠雄・山下 格・風祭 元監修 こころの科学82 自己の心理学 日本評論社 Pp. 32-36
- 岡田 努・永井 徹 1990 青年期の自己評価と対人恐怖的心性との関連 心理学研究 第60巻 第6号 386-389
- 斎藤誠一 1993 青年の心理学 落合良行・伊藤裕子・斎藤誠一著 ベーシック現代心理学第4巻 有斐閣 25-50
- 田中康裕・小川捷之 1992 対人恐怖症論-その文献的考察- 上智大学心理学年報 第16号 7-18
- 徳本 祥・北山 修 1995 自尊感情と欲求不満解決様式との関連について-TAT 図版を利用して-九州大学教育学部紀要(教育心理学部門) 第40巻 第2号 37-45